

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第二部

第七章

Long Goodbye; and...



峯村 明

リ・コンストラクション

登場人物

7・Long Goodbye and...

114.

115. Eternal Girl

116.

117.

118.

119.

120.

あとがき

奥付

登場人物

桧山 健	21歳の大学生
間宮 ひろ	日本の高校生
カヤ&アイラ	ホテル《ミッドランタ》の管理人夫妻
ウィンディ・サトウ	ウィリアムス法律事務所の若手弁護士

7・Long Goodbye; and...

114.

「オーナー！」

ある日の夕刻、アイラから館内電話がかかってきた。顔がこわばっているのが目に浮かぶ声だ。

「お客さまです、ウィリアムス先生のところの……」

「——ウィンディか」

アイラは電話口で眉を寄せ浅くうなずいた。彼女はウィンディ・サトウとは反りがあわないらしい。健は無表情に立ち上がって部屋を出た。

「おい！」

カヤが奥さんを短く呼んだ。

「なによ」

「取り次ぐなよ！ オーナーはこれからお出かけなんだぞ！」

「そんな事言ったって！ 大事な用かもしれないじゃないの！」

ウィンディ・サトウは健の顧問弁護士を代行していたことがあるのだ。

「昨日も電話がかかってきたの。オーナーの私的なスケジュールは教えられないって言ったんだけど。直接やってくるとは思わなかったわ！」

「不意打ちかよ！」

「なんの用なのかしら……大丈夫かしら、オーナー」

アイラは眉をくもらせてエントランスの方へ目をやる。

「オーナーは女性に甘いからなあ！ 俺なら女なんかには、がつん、と言ってやるんだがな！！」

アイラはゆっくりと振り向いた。

「“女なんかには、……？”

口元は微笑んでいるが、目は笑っていない。

「あ……なんでもありません、ごめんなさい」

*

「ハイ」とウィンディは気さくに声をかけてきた。今日はきりきりとしたスーツ姿で、セミロングの豊かな髪は小さくまとめられている。

「お久しぶりね！」

健は軽くうなずいて「なにか？」とだけ言った。

「何日かお留守だったわね」

「……………」

「そんな顔しないでくださらない？ 今日はね、お別れに来たんだから」

「……お別れ？」

「ええ。私、ウィリアムス先生のところ辞めたのよ」

「……………」

「勘違いしないでね、ケン、あなたにふられたからじゃないわよ。前からお話があったの、今度の雇い主さんなんだけどね」

「——ヘッドハンティング？」

「そんなようなものよ、力になってくれないかってずっと口説かれてたの。お給料も今よりずっといいし、お互いに気が合いそうだし。……あ、女性よ、雇い主は」

「……………」

「その女性(ひと)、ヨーロッパに実家があって今度帰国することになったのね、私もいっしょに行くことにしたわ、ヨーロッパで仕事するのは夢だったの！ 願ったり叶ったり、ってとこ」

「そうか……」

「あなた、CPA(公認会計士資格)を取るんですって？」

「……ああ、ついでにCIA(公認内部監査資格)も」

「そう、私も学生のころそれはそれは勉強したのものよ、世界で仕事するんだ、自分を試すんだ、ってね！」

「きみならできるだろう」

「ええ。私にならできるわ、そのために勉強してきたんだもの。不安がないわけじゃないけど、ふしぎね、あなたにそう言ってもらうと、ほんとに大丈夫な気がする」

「きみの新しい雇い主がどんな人か知らないが、陰から応援させてもらうよ」

「……ありがと。すごく、嬉しい！ お別れのキスをしてくれたらもっと嬉しいんだけど？」

「それは断る。オレは日本で育ったんだ。日本人にはそういう習慣がないからな、わるいが、どうしても抵抗があるんだ」

「オーケー、わかったわよ、あなたも頑固なウィリアムス先生とおんなじ、自分の習慣を曲げないひとなのよね。ねえ、私、あなたがほんとに好きだった、あなたに会えてほんとによかったと思ってる。だから——ありがと、って言わせて。いつかまた会いましょう、ケン」

115. Eternal Girl

アデレード郊外、グレネグルは、ホルドファスト湾に臨むマリーナと海岸の、落ち着いた古い町だ。

健は一人になりたいときはこの町へ来る。アデレード居住歴の長いペイリーが教えてくれた居心地のいい小さなバーがあるのだった。いつもは学生らしいラフな格好で訪れるが、今夜は改まったダークスーツ。

彼はドレスアップすると表情から雰囲気からまるで変わってしまう。今宵も出かける際にアイラが惚れ惚れと見とれていたくらいだったし、バーのマスター兼バーテンダーは初見のお客だと思った。

*

その晩やって来たダークスーツの客は、黒髪と黒い瞳が目を惹いた。東洋人のようでもあり、ちがうようでもあったが.....

二十代前半——社会人なのか学生なのか、なんとも判断しかねた。

若い。だが、落ち着いている。そんな第一印象があった。

シティの大学生にしては落ち着きすぎているし、遠来の観光客はこんな古い小さなバーをわざわざ選んだりしない。はてさて——、とマスター兼バーテンダーは観察した。

その東洋人は.....バーテンダーはそう決めた.....もうひとつ、目を惹くものを持っていた。

ダークスーツの胸に留められた小さなコサージュ。

白い小花をうすみどりのオーガーンジーのリボンが彩る、可憐な花束。

客はカウンターの右手奥、壁際からスツールをひとつあけてすわり、ギムレットをオーダーした。初老のバーテンダーは若い客がからだの右側をいくらか開きかげんにしているのを見て、連れがいるのだな、と思った。

だれか、女性をエスコートしている、といった塩梅だった。

控えめに声をかけてみる。

「もしお連れのかたをお待ちなら.....しばらく私がお相手を.....？」

客は黒い瞳をあげた。形のくっきりした切れ長の目。きつい感じのある目元だが、まなざしは意外なほどやわらかい。

「——そう？」

彼はバーテンダーの申し出に、微笑と、豪州英語ではない、クィーンズイングリッシュで応じた。

「……じゃあ……僕の連れがどんなひとか、あててみる？」

「さようございますね……」

バーテンダーはちょっと考えた。

年齢の話題はやめておこう。年上の女性かもしれない。

(……いや、男かもしれないぞ……)

「チャーミングな方なんでしょう？」

客の目が笑っている。

「ああ。……とてもチャーミングな子だよ」

バーテンダーは眉を持ち上げ、すかさず、いたずらっぽく、冗談めかして、絶妙のタイミングでたずねる。

「恋人？」

青年は笑った目のままバーテンダーをみてうなずいた。

バーテンダーもつられて頬を緩ませ、オーダーされた飲み物を粹なくさで客の前におく。恋人を待つ若い男の微笑というのはなかなかいいものだ、と、他愛なく幸せな気分になる。

仕事の憂さ、妻への不満、ガールフレンドの気まぐれを嘆くなりぶちまけるなりしていく無粋な客の方が圧倒的に多いのだ。

この青年と恋人はこれから幸せな時間をすごすのだろう――

今はロマンチックなプレリュードがかかっているのだ、それにふさわしいひと時をすごさせてあげよう――

「お客さまのお連れでしたら……髪は黒、瞳も黒……」

「……あたってるよ」

バーテンダーは自分用にジン・ライムを作り、捧げもった。店内には幾組か客がいるが一人でいるのはこの東洋人だけだ。バーテンダーは客のグラスと乾杯する。

「…… “ローマの休日” を知ってる？」

「おお。もちろんです」

「初めのほう…… 髪を切る前の、長い黒髪の王女……」

ふむ、とバーテンダーは鼻をならした。

「王女さま、お仕事とお立場のストレスからかんしゃくをおこす、の図ですな！」

「そう」

客はなにか思い出したようにくすっと笑った。

「あの映画はモノクロだから王女が白以外の、どんな色を身につけているか、まではわからないだろう？」

「ええ」

「あの王女にはどんな色が似合う？」

「そ……うですねえ……」

バーテンダーはなぜかわくわくしてきた。

古いモノクロの映画に色をつけてみようとは、今まで思いつきもしなかった。

「ローマの町…… 私は行ったことはありませんが…… あの映画の風景や、人々の影の濃さからして、きっと日差しが強かったことでしょう。」

季節は初夏から夏……若々しい緑、色とりどりの花、真っ青な空、きらめく水しぶき、美しく力強い、歴史ある遺跡そのものの町……！ 町も、行き交い、住まう人々も、季節も、なにもかもが生命の力に満ち溢れていたことでしょう——！」

客はバーテンダーの夢見るような語りを興味深げに聞いていた。

「冒頭で王女さまが豪華な調度品にかこまれてかんしゃくをおこす場面では、多分、外の世界のみずみずしい鮮やかさ、雑然とした生活感と対比が取られていたのではないのでしょうか……。色にすれば、ナイーブな……叙情的な色……ということになりませんか……」

バーテンダーはしゃべっているうちに何か思いついたらしく、棚にずらりと並んだボトルの中から幾本か選び、取り出したグラスに注いでいる。

「色にすれば…こんな具合でしょうか……」

淡い間接照明にかざされた透明なグラスの中は、朝焼けのように繊細な赤紫色だった。

客はおどろいて目を瞠った。

「すごいな！ 彼女のイメージにぴったりだ！」

バーテンダーは客がすっかり満足した様子を見せているので、心からうれしくなった。

「あなたの王女さま、素敵な名前をおもちなのではないですか！」

大事な恋人の名を見ず知らずの人間にあかすわけがない ——ただ、はずみでそう言っただけだったが、

「……ナナコ」

客は、彼にとって宝物であるはずのその名を口にしました。

「……プリンセス・ナナコ。お目にかかるのが楽しみですよ」

ダークスーツの胸ポケットから白いコサージュがはずされ、右のスツールの前に置かれた。

「では、それを彼女に」

バーテンダーは赤紫色のグラスを持ったまま、コサージュに目が釘付けになった。客はなにげなく言った。

「——三年前に——」

コサージュの前に丁寧に置かれたグラスに自分のグラスのふちを触れさせる。

キン、と澄んだ音が鳴った。

客はそれきり黙りこみ、バーテンダーは照明の外へそっと身を引いた。

*

冷たい、細い雨の降るモノクロの街を傘もささずに少女が歩いてくる。

雨に濡れたアスファルトのにおいがする。

白い夏の制服の少女は濡れた髪をかきあげ、彼を見つけて目を輝かせ、小さく、嬉しそうに歓声をあげた。

彼の前までかけて来て立ち止まり、くしゅん、と小さくしゃみをし、子猫のように身震いした。そして、濡れてからだに張り付いてしまった制服をやおら脱ごうとする。

あわてる彼を少女はげげんな表情で見上げる。

彼はそっとカーテンを引き、少女の着替えから意識をそらした。

カーテンはやがて向こう側から左右に開かれ、濡れていた子猫は身づくろいを終え、清楚にドレスアップした姿をあらわした。

深紅のカーペットの上をゆっくり歩いてきて、たおやかな動作で左手を差し出す。

彼はその手を取り、導き、自分の右側に座らせた。

(——話があるんだ。聞いてくれる?)

彼の想念の中で少女はいつしか三年分の歳月を重ね、十九歳の輝く肌を赤紫の布の中に隠している。

長い黒髪をかけてあらわにした耳も、胸元の鎖骨の影も、幼さの残る横顔も、目に映るところはどこもかしこも繊細なラインを描いてかわいらしかった。

きっと隠されたからだのすみずみまでがそうなのだろうと、かすかな懊悩とともに彼は考える。彼が望めば、少女はその赤紫色のシルクを自らとりはらうことをいとわないだろう。

だが、それはできない、と彼は思った。

ナナコは——彼の思い出の中にしまわれた、冒しがたい、永遠の少女なのだから。

やさしい微笑を口元に浮かべ、小首をかしげ、少女はささやいた。

(.....聞いわ。あなたのお話なら、あのことみたいに、なんだって.....)

(.....彼女を.....愛している.....)

(.....)

やさしい声が彼の名を呼んだ。

やさしい瞳が彼を見つめ、やさしい指先が彼の手に触れた。

遠い思い出の底から甦ったぬくもりは、やさしく彼を温めた。

(.....わたしの願いは、あなたが生きてくれること。心のままに生きてくれること。ただそれだけ.....だから.....)

愛らしくちびるが彼の名のとおり動いた。

(立ち止まらないで ——)

グラス同士がもう一度、キン、と鳴った。客は赤紫の方を手にとり、ひとくち含み、ゆっくりと味わっている。

花のような優しい香りの背後の、柑橘類のかたい手ざわりは、まるで……
思い出の中のナナコ……

痛いほどの慕わしさも懐かしさも、彼を引きとめはしなかった。

やわらかな手のひらの感触は、そっと彼の背を押しやった。

(……立ち止まらないで。でもあなたが振り向けば、わたしはいつだってここにいるわ)

深い夢からさめたように、彼は伏せていた切れ長の目を上げ、バーテンダーに微笑を送った。

バーテンダーは笑顔を返した。心を込めて、微笑んだ。

「お気に召していただけましたか！」

客はうなずいた。

「—— おかげで決心がついた」

カウンターの上のコサージュを胸に戻さず、ポケットにしまい、立ち上がった。

ありがとう、と彼は日本語で言い、バーを出て行った。

豪州が日本の国土の何倍の面積を持つのか、事前に勉強したような気はするのだが、ひろにとってそこはただ広い、という印象しかなかった。そんなものだった。

そこでだれか知人に出くわすなど、まるでいい加減なつくりの漫画のような話だ。だからメルボルン空港で衝突した白人美女の素晴らしい脚線のむこうから現れた青年が、自分に向かって手をのばし、声をかけてきた時はなにかの冗談だと思ったのだ。桧山 健に似た誰かなのだ、と。

だが美女が呼ぶ彼の名も、彼の声音も、ひろが知っている人のものだった。めったに見せることなかった、片方の唇をぎゅっと吊り上げる笑い方もたしかに彼のものだったのだ。帰国するまでは友人との雑談だの雑事だのにかまけていてゆっくり反芻する間もなかったが、数日たって落ち着いてくるとひろは次第に落ち込んだ気分になってきた。

(桧山さんのまわりには、かならず、これでもかっていう美少女や美女がいるのよね……)

あのときいっしょだった彼女はなんなんだろう、とつい詮索してしまう。えらくセクシーな彼女を桧山は連れだ、といていたのだが。

(桧山さんていつもぶあいそだったから人ぎらいかと思ってたけど、ちがうのかしら！ 案外、だれとでもよろしくやっちゃうタイプかもしない)

落ち込みはじめるとつまらない考えに傾くもので、ひろは枕を抱えてひとり悶々とするのだった。

(どーせ、あたしはたいしたことないわよ！ なによ、桧山ったら！ 空港であたしの太ももしかみてなかったくせに！)

メルボルンは真夏だったが日本はまだ寒風が吹きすさぶ冬のど真ん中だ。その温度差がよけいひろを減入らせた。

(ふん、だ！！ 桧山のばか！！)

まもなくひろはインフルエンザの高熱にやられて、何日も寝込む羽目になり、何度もいやな夢を見た。光の届かない暗闇に引きずりこまれて外へ出ることができず、じたばたともがき続ける夢だ。

(あーやだやだ、こんな夢みるのもきつと桧山のせいだわー)

高熱にうなされながら、暗闇の悪夢と、桧山と白人美女が連れ立っている夢とを交互にみつづけたひろだった。

*

インフルエンザから生還してみると、外は春一番の強風が吹き荒れていた。いつのまにか空気がぐっと緩んでいた。

修学旅行とそれに続く高熱のおかげで何日もロードワークをしてない体はすっかり緩んでしまった感じた。

走ろう、とひろは思った。

走り出してみると体の調子はすこぶるいいことに気がついた。とても気持ちよく走れる。熱が雑多な思惑を燃やしてくれたのかもしれない。

何も考えずに汗を流せる心地よさは久しぶりだった。

高校の卒業式の日も漠然と(あたし、来年の今頃はなにやってんのかな)と考ただけで、ひたすら走ることで通り過ぎてしまった。調子がよくて、このままどこまでも走っていけそうな気分だった。

*

春休みに入って陸上部の部活があったその日、なんとなく電車を使って、帰りは駅から歩きだつた。夕暮れ時の湖畔を歩いてみたい。朝からなんとなくそうしてみたかったのだ。

ひろはその人影に一步一步近づいて行った。膝が頼りなく震える。

(これって、夢なのかな……)

春にはまだ少し遠い夕陽の中、その人はふと横顔を見せた。

(やっぱり夢だわ……こんな都合よく、ここにいるわけないもん)

その人の目をとらえ、声を聞くまでは、信じられない、とひろは思った。

(抱きついてみたら他人だった、なんて、冗談じゃないわ、かっこわるいわ)

そう考え、ひろはすがりついて泣きじゃくりたい自分自身を知った。
今、つかまえなくちゃ。

今その手をつかまなくては、シルエットは夕陽に溶けてしまうにちがいない。膝を震わせ声を震わせ、断崖絶壁に身を投げ出す想いでひろは尋ねた。

「ひやまさんなの？」

逆光の中の彼の表情はよくわからない。だが黒い目が、そうだ、と言った。

「ほんとに？」

彼はうなずき、黒髪が揺れる。

「夢じゃないよね？」

「夢じゃない。ほら」

声は触れた体を通して直接伝わってきた。

「ほんものだろ？」

「——うん」

抱擁は温かく、声は深かった。

「会いたかった——」

「うん」

「ひろ」

「うん」

「——ただいま」

「うん——」

針葉樹の香りは間違いなく、彼だった。

117.

新城社長のところへ挨拶にいくところだ、と桧山は言った。

「荷物、持ってやる」

「あ、いえ、だ、だいじょうぶ、ジャージしか入ってないから軽いの。あれ、桧山さん、荷物は？」

「ホテルへ置いてきた。何日か前に、行きます、って社長に連絡したんだ。おまえのアドレスは知らなかったし。そうしたら社長が観光ホテルに一室とってくれた。商工会の会員は格安で利用できるからって。荷物はそこ」

「そう、ですか」

「オレ、この道あんまり歩いたことないな。ふ...う...ん、なかなかいい景色だったんだな」

並んで同じ道を歩いているのが信じられない。

成り行きで再会の抱擁を交わしてしまったあとの会話はなんだか気恥ずかしくごちなく、とりとめもなかった。

桧山は新城社長夫妻の夕食に招待されていて、もちろんひろも人数に入っていた。

物件の元住人を歓待するというのも妙な話だが、どういうわけか桧山は社長夫妻にかわいがられていた。わずかな期間だったがいっしょに働いたせいかもしれない。

新城家のダイニングでひとしきり歓迎してからようやく社長は尋ねた。

「ところで桧山ちゃん、来日の目的はなんなのよ。わざわざ出かけてくるってことは、親戚の法事かなんか？」

「似たようなもんです。墓参ですよ」

ひろは思わずあっと声をあげた。ぴん、ときた。桧山はテーブル越しにひろの目をとらえて言った。

「そうだ、おまえも知っているひとのだ。いっしょに行こう」

「まあ、そうなの？ ひろちゃん。それは行っていらっしやい」

「そうだねえ、お彼岸だったんだね。行っといで行っといで」

「え……」

あれよあれよと言う間にふたりの墓参行きが公認されてしまったのだった。

夕食会のあとひろはマンションの外まで桧山を見送りに出た。

「強引、だったかな」桧山が言う。

「……いえ」

「ひろ」

「……」

「明日の朝、そうだな、九時まで湖岸公園の駐車場で待ってる。おまえが来なければ、オレはひとりで行く」

ひろにはそれは、ひとりで行ってそのまま帰途についてしまう、という意味にとれた。

わずかに芽吹き気配をみせてはいるが街路樹はまだ寒色の裸木だ。その下を彼はひとりでホテルへ戻って行った。新城夫妻の了解はすでに出ている。あとはひろが自分できめなければならなかった。

春分の日の朝の湖岸公園駐車場は数台の車が止まっていたが見慣れたものはなく、ひろは戸惑った。

どうしよう、と見回していると「ひろ！」と呼ばれた。見ると遊覧船乗り場の棧橋で釣り糸を垂れる数人の中に桧山がいた。釣り人たちはいっせいに桧山を振り返って声をあげた。

「にいちちゃん、うるさいよ！」

「そうだそうだ、また逃げられた！」

「彼女と待ち合わせかよ！」

「こちとらスティックに釣りしてんのに、てめえはデートかい」

「……ソーリー……」

「やかましいわ、ここは日本だ」

地元の釣り人たちに口々に非難されてそそくさと引き上げてくる桧山を見ていて、ひろはなんとなく笑いがこみあげてきて顔が緩んでしまった。

「なにやってたんですか？」

「べつに。見てただけさ」

「釣り、好きなの？」

「うーん、やったことはない。でも針を変えたほうがいいのかエサはこっちがいいとか言ったらみんなうるさがるんだ、そっちの方がぜったいよく釣れるのにな！」

「やったことないのに、どうしてそうした方がいいってわかるの？」

「さあ。なんでかな、だれかにそう教えられたんじゃないかなあ」

なにわけのわかんないことってんのかしら、とひろは思ったが、相手が表情を改めてじっとみつめてきたので黙ってしまった。

「よく来てくれた」

「……行きます。連れてってください」

ふと見ると、棧橋の釣り人たちがそろってこっちを見ている。興味深々のまなざしを感じて桧山は「行こう」と促した。

車はレンタカーで、ひろが見慣れないのも当然だった。

奈々子が眠る霊園は見晴らしのいい高台にあった。春先の日差しは暖かく、線香の煙と匂いが漂っていてもロケーションは申し分なかった。桧山はここへ来るのは二度目だということだった。「何度も足を運ぶ気にはならなかったんだ」と言った。

ひろはなおみ専務のすすめで生花を抱えてきていた。『西ノ宮家』の墓石の前には供え物も雑草もなく、きれいなものだった。

「奈々子さんて……ほんとにいた人だったのね。へんなの。お墓みてはじめてそう思うわ……」
花受けに花を挿しながらひろはそうつぶやく。

「最後に会ったのは、あれは正月だったな、初詣に行っばったりというわけさ。でもオレは兄弟と一緒に、奈々子は友達といっしょだった。ほんと、縁がないよな」

桧山はくすつと笑い、ひろはおずおずと尋ねた。

「それが最後になっちゃったの？」

「ああ」

「なにか……話したんでしょう？」

「いや、人ごみの中だったんだ。あっという間に見失ってしまった」

「……………」

逡巡して、ひろは思い切って聞いた。

「桧山さんは……………」

「うん？」

「奈々子さんを……愛してた……んですか」

そう口にしてから、バカなことを言ってしまった、とひろは後悔した。桧山の軽いため息を聞いて、後悔はもっと増した。

「……ごめんなさい。そうでなかったら十何時間もかけてお墓参りに来たりしませんよね……」

きつと、バカなことを聞くやつだと思われただろう。

桧山はしばらく黙っていたが、思い出したように上着のポケットからなにかとりだした。差し出されたそれを見て、ひろは「あっ」と声をあげた。

「これ、おまえのだろ？」

「そうよ！ 旅行中に失くしたの！ どうして……………」

「空港で……………おまえが立ち上がったあとに落ちてた」

「……あのとき落としたのね！ それねえ、彼女がまだあたしの部屋にいるときに飾っただのよ、あたし学校や部活であまり部屋にいなかったから、それで少しは気休めになるかなと思ったの」

「……修学旅行にまで持ってったのか？」

「ええ。誰もいない部屋に何日も置いときたくなくて。出発前に小さく作り直して……」

「オレはこれをかなり前に見た」

「そんなはずないわよ……」

「去年の夏、だからおまえたちが同居してたころ」

「……そんなはずない、だって……」

「本当だ。といっても、夢でみたんだけどな……これを髪につけてオレに別れを言いに来た」

「……………」

「——ひろ？」

「ななこ——奈々子さんは、なにも言わないで行っちゃったの。お別れのことばもなんにもなかった」

「——そうだったのか」

「彼女が行っちゃう時になに考えてたのか、私にはわかんない。お父さんは何か話したみたいだけどお父さんもはっきり教えてくれない」

　　桧山はひろの手をとって手の平にコサージュをのせてやった。

「え——？」

「おまえに感謝していたのでなければ、それをオレに見せにきたりしないだろ」

　　ひろはかたく目を閉じた。

　　奈々子の墓前で、失くしたと思っていたものが戻ってくるとは思いもしなかった。

119.

　　ひろは小さなコサージュをオーガンジーのリボンで墓石の花受けに結んだ。そこへ、奈々子の元へおいていくのが一番いい、と思った。

霊園の緩やかな階段を下りていくと、これから墓参に行く数人の女性たちの一行とすれちがった。霊園という場所柄、会話の声音も服装の色合いも抑えた一行なのだが、そこだけ花が咲いたようにふしぎに華やいでいた。

その中のひとりが「あら！！」と声をあげる。その人は「先に行ってて」と連れに声をかけると桧山とひろを追ってきた。

「あの！ 桧山さん！？」「——西ノ宮さん」

桧山と中年の女性が挨拶を交わし終わるのをひろは少し離れて待っていた。ふたりは互いに思いがけない再会を驚いていたが、会話の端々から先ほどの墓参の一行は西ノ宮夫人の親戚たちだということがわかった。

「もうお目にはかかれなかったのに」

この後彼女の姉妹や叔母、姪たちと会食の予定なのだという。

「僕も今日は連れがいますので」

「なかなかご縁に恵まれませんかわねえ！」

桧山がひろを友人だといって紹介すると、西ノ宮夫人はひろに向かって丁寧に頭をさげてきて、あわててひろもぎこちない礼を返した。

「奈々子さんのおかあさんなのね……きれいなひと」

「女系の一族みたいだな。美女があれだけ揃うと壮観だな！」

「ほんとねー！ お墓参りに来た人たちを、振り向かせるなんて」

「……待たせてわかった。さあ行こう」

「ええ」

*

「……前に……やっぱり聞かれたことがある。『おまえは彼女を愛していたんだろう？』」

ひろは運転席の桧山の横顔をみあげた。ひろが聞き流されたと感じた、先刻の問いに、彼は応えようとしていた。

「誰に聞かれたのか、ぜんぜん思い出せないんだけど、誰かにそう聞かれた。自分で問うたのかもかもしれないな」

「……」

「その時は、答えられなかった……今も答えられない。オレの奈々子への気持ちがどういうものか、オレにもわからないんだ。初めて奈々子を見た時の衝撃は忘れられない。ショックで体がすくんだんだ。……ひどく、惹かれる相手ではあった。けれど、どうしても、理由がわからない。ただ見ているだけで、精一杯だった」

十七歳と十五歳のふたりは、肩を寄せ合うことも手をつないで歩くこともなかったのだ。

「それ以上踏み込めない、触れられない、……だけど目で追わずにいられない」

「……私、奈々子さんてきっと妖精だったんだと思う。松山さんだってそう言ったじゃない」

「オレが……？ そんなこと言ったっけ？」

「言ったわ。ウチの鳥居の前で、『妖精と人間はいっしょに棲めない』って。覚えてないの？」

「そうだったかな……妖精か、そうだな、人をとりこにするという意味なら、そのとおりだ」

120.

「だけど、それなのに、だな。そんなやつがどうして成仏しないでオレの近くにいたんだろ？ しかもオレは、そういうのを見る力も感じる力もない。おまえを通じて初めて知ったんだ」

「ええ……そうね……」

「よくわからない。考えてもムダかもしれない。理由とか原因は、ものすごく遠いところにあるかもしれない」

「遠いところ？」

「さあ……どこだろうな」

「……」

「ちょっと車、止めるぞ」

車線を変えた車はスピードを落としながらパーキングエリアに入っていく。展望台の表示板があるところをみると、眺めがいい場所らしい。

「あれ——」

「ああ、——竜神湖だ」

車を降りて展望台へ歩くと、柔らかな日差しをきらきらと反射させて、眼下のはるか下の方に湖が広がっているのが見えた。

「へえ——こんなところから見えるのね——きれい」

「おまえ……調子がよさそうだな」

「え？」

「歩き方とか見てるとわかる」

「……またあたしの脚みてたのね！」

「また、ってなんだよ。そりゃあおまえの脚は一見の価値があると思うけどさ、力がみなぎってるってオレは言ってるんだ」

「あ、そうね、自分でもそんな感じがする！……あのコサージュの花にはねえ、思い出がいっぱいあったの。修学旅行で失くしたってわかってほんとに落ち込んでたのよ、でも戻ってきたし……
桧山さんに会えたし」

「約束しただろ、きっと会いにくるって」

「うん——ありがとう。——それでね、なんだか私、とってもわくわくしてるの。嬉しくて気持ちがいいのね。さっき——奈々子さんのお墓をみて、私がきょうれつに思ったこと——」

「——なんだろう」

「走りたい——って」

「……………」

「なんていうのかな、からだの奥から力が湧き上がってくるみたいなの、走りたくて、たまらないの、こんなの初めてなのよ……！」

「……そうか、それはすごいタイムが出そうだな……」

「そうなの、最近、ほかの部員もみんないい感じなの！ 新入生にも有力な子が入ってくるしね、インターハイがほんとに具体的になってきたの！」

「——インターハイ——」

「うん。夢だったのよ！」

「夢じゃないだろう、今のおまえならきっと実現する」

「そうかな！」

「ああ、オレはそう思う。がんばれ」

「うん！ ありがとう！」

「思い切り走れ。そのあとでいい、オレのところへ来てくれないか」

「——え？」

「それを伝えにきたんだ。ひろ、おまえを愛している。そばにいてほしい。——結婚してください」

7・「Long Goodbye; and...」

8・「With three」へ続く

あとがき

No.115で楢山くんが頼んで作ってもらったカクテルは『バイオレット・フィズ』ですね。

ジンとパルフェ・タムールという紫色のリキュールにレモンかオレンジのショートカクテルが『ブルームーン』、これに炭酸水を加えたロングカクテルが『バイオレット・フィズ』。
材料は炭酸水以外いっしょみたいですが、ブルームーンの方が青みが強い印象があります。
奈々子は赤紫のイメージで、バイオレット・フィズを作ってもらいました。

カクテル言葉というのがあるそうでした、ギムレットは『遠い人を思う』。

ただ今ここを最優先して、第二部を執筆、編集中ですが、どうも第十四章まで行きそう。第三部に
とりかかりたくてうずうずしてます。

時間が、あまり残されてないという気がして仕方がない。どこまで行けるやら。

2025年3月22日 記

奥付

リ・コンストラクション

第七章 Long Goodbye; and...

2025年 3月30日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[写真AC](#)
[Designer](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社